

# 青梅市文化財ニュース

第426号

令和5年4月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

## 猫の町

青梅駅周辺はここ何年か「猫の町」として、知られるようになってきました。  
それはどのようにして始まったのでしょうか。

平成3(1991)年に青梅商店街活性化事業の一つとして、青梅・住江町にある住吉神社  
周辺で行われた「青梅宿アートフェスティバル」の頃からです。

このあと第8回(平成10(1998)年)の「招き猫たちの青梅宿」が行われました。

空き店舗対策事業として「昭和レトロ商品博物館」や「青梅赤塚不二夫会館」(現在は  
廃館)のオープンと続き、映画看板も近辺に飾られました。

明治35(1902)年、青梅駅前には、「初音座」という大衆演芸場がありました。のちに、  
映画館になりますが、上映する映画の看板を描いていたのが、久保板観さんで、父の代  
から看板を描いていました。しかし、町から映画館も姿を消し、映画の看板も見られな  
くなりました。

平成16(2004)年、町おこしのため、板観さんに白羽の矢がたったのでした。住吉神社  
の周辺や青梅駅の地下通路などに映画の看板が掲げられるようになり、レトロな映画看  
板の町として、テレビなどの取材で放映され、これらの看板を見に多くの観光客の方が  
訪れるようになりました。

しかし、板観さんも亡くなり、その看板を直す人もいなくなり、老朽化や、風などの  
落下による危険性が出てきたため、街中の看板も下ろされ、数も少なくなってきました。

平成10(1998)年、「招き猫」のフェスティバル以後、猫の町として、猫のオブジェが  
青梅駅周辺でも、あちこち見られるようになりました。

街中には昔から商店も多く、店頭には招き猫も多く飾  
られていたことも要因の一つであったと思われます。

萩原朔太郎氏が書いている詩の世界で、「軽便鉄道を  
途中で下車し、徒歩でU町の方へ歩くと、そこでいろ  
ろな世界を見、猫ばかりの町を見ているうちに、意識を  
回復し、現実の世界へ戻る」という話が書かれています。  
この世界が青梅の町に似ていたともいわれています。



谷中（東京都台東区）には、路地裏が多く、猫が住むには快適な町であったようで古くから多くの猫が住みついていました。

青梅も昔は猫が多く住みついており、青梅の街並みとも似ていたことから「東の猫町（谷中）」に対して、青梅は「西の猫町」として、市内外に広く知られるようになってきました。

また、青梅周辺には「雪女（小泉八雲・ラフカディオ・ハーン）」の舞台となったとの説があります。

旧調布村(現在の長淵地区)にその関係者が住んでいたことから、調布橋の橋のたもとには、雪女の碑（平成 14(2002)年）が建てられています。この碑の裏面には「武蔵の国、西多摩郡調布村の ある百姓がこの土地に伝わる言い伝えとして語ってくれたものである。」との銘文があります。なお、昭和レトロ商品博物館の 2 階には雪女の部屋があり、多くの資料が展示されているため、いろいろな地域から、学生さんや研究者の方がよく訪れているそうです。



一度、博物館や街のなかを散策して新しい発見を見つけるのもよいのではないでしょうか。

参考文献：『猫町』 萩原 朔太郎 著

「西多摩新聞」 平成 30(2018)年 11 月 16 日号

お話を伺った方：横川 秀利 氏

（文責 東山啓子）